

海外紹介

世界の鍼灸コミュニケーション(13) ～英国の大学における鍼灸教育事情～

ロンドン在住

大嶋 真吾

Undergraduate Acupuncture Education in the United Kingdom

Shingo OSHIMA

Member of British Acupuncture Council and Register of Chinese Herbal Medicine

はじめに

自由や平等、ひいては健康、自己実現を誰もが享受する権利があるとする博愛主義の伝統を持つ英国で、特に様々な文化的な背景、世界観、人間観が交わる非常にダイナミックで現代的なロンドンでは、医療の社会・人間に関わる多様なモデルを模索・実践されている。

このロンドンの社会環境の中で、鍼灸の教育・治療に関して、英国の大学教育の一般的状況、鍼灸教育が大学教育になるまで（LSATCMとWestminster University、CCCP学部の合併の過程）、Westminster Universityでの鍼灸教育カリキュラム、卒業後の進路、鍼灸教育・治療の現在の問題と今後の発展、日本鍼灸への関心、の順に簡単に紹介する。

1．英国の大学教育一般

英国では、1998年まで、少数の私立大学をのぞき、原則的には大学教育は、全額、税金でまかなわれ、学生には経済的な負担は一切なかった。学生に能力があれば、3年間の学生生活の生活費も支給されていた。ただし、1997年の労働党の政権就任以来、学生の一部授業料負担が実施され、

1999年時点では、一人当たり年間1000ポンド（約19万円）の負担となっている。3年間に渡り学期中は学問を追求する以外の時間は非常に少なく、またアルバイト先が少ない英国では、大学教育は密度が高い。つまり、大学生はお金の心配はしなくてよいから勉強を一生懸命にするようにということである。

2．LSATCMとWestminster University、CCCP学部の合併の過程

このような教育に対する認識の中で、鍼灸の教育は幾つかの私立の学校が担ってきた。private collegeであったLondon School of Acupuncture and Traditional Chinese Medicine（LSATCM）が、複数の既存の大学教育機関との長期にわたる交渉の結果、1996年にWestminster UniversityのCentre for Community Care and Practice学部（CCCP）と合併した。ここに至るには以下に述べる複数の理由があったという。

学校運営上必要な経済的な基盤の安定、学費の国からの援助（日本に比べ遥かに安い学費とはいえ、完全に自己負担の学費が多大な重荷であるのは否定できず、ドロップアウトも少なくなかった

という)、様々な研究・臨床に必要な施設・資源へのアクセス、complementary medicine (相補医学)の他分野との人的・学術的交流の確立があげられる。

国を問わず医療は地域と非常に密接に関わりを持っており、英国社会の医療制度の中でほとんどが自由診療 (private practice) である鍼灸治療に求められるものは中国のそれとは当然異なる。LSATCMでは早くからこの相違点を認識しており、英国社会が期待する針灸治療の教育の実践という視点を持っていたようである。

ここで簡単にCCCP学部について説明しておく。その前身は、ロンドン市内のcomplementary medicine治療者を含めた革新的なGP (General Practitioner, 家庭医)が集まるMarybone医院である。CCCP学部の教師陣は、CMのトレーニングを受けた医師が多い。名前が示すとおり、医療と社会の関わりを見つめ、医療を取り巻く社会政治制度・枠組みの研究、医療従事者 (医師、看護婦、ソーシャルワーカーなど)の再教育、complementary medicine (針灸、ホメオパシー、ボディーセラピー、西洋ハーブ、栄養学など)の教育、英国の医療制度改革計画の策定、労働党政府への進言など非常に多岐にわたる教育・研究機関である。

3. Westminster Universityでの鍼灸教育カリキュラム

三年間の学部教育は、中国での医学教育を参考にしつつ、英国の社会・医療制度で針灸治療にもとめられるものを考慮し、カリキュラムが組まれている。少数ながら、ベトナム、チベット、韓国、日本人の治療者も英国に在住していることから、中医学以外のアジアの伝統医学・東洋医学に興味は持たれているが、やはりアクセスの問題があり、非常に明快な理論体系を持つ中医学は文化 (自然観、言語、社会、人間観など)の非常に異なる英国では東洋医学のスタンダードと認識されている。もちろん、東洋医学の特徴である多様性は認識されているが、大学学部教育レベルでの基礎教育としては中医学が最適との認識が持たれているようだ。

コースは、3学期制、年間30週、3年間の全日

制である。学生の年齢は20代から50歳までとの幅広い。医療のバックグラウンドを持たない転職組の他に、MD、看護婦、歯科医、ソーシャルワーカー、理学療法治療者など医療従事者も多い。また、ロンドンという立地条件から、学生・教師陣ともに国際色豊かだ。

授業内容は、西洋医学、東洋医学、臨床実習、practitioner developmentからなる。さらに興味深いことに外部のResearch Council for Complementary Medicine (RCCM: 相補医学研究協議会)から講師ヴィッカーズ氏 (Andrew Vickers) を招き、research methodology (研究方法論) という講座をもうけている。ここではよい研究とは何かといったものを教えている。これは、卒業生がよい臨床研究・文献を探す手助け、あるいは、研究論文を書くための必要な知識・方法論が必要との認識からである。西洋医学の部門は、解剖学、生理学、病理学、栄養学、マッサージからなる。これらの多くは、1, 2年時に他の学科の学生とともに学ぶ。

東洋医学は、1年次に、中医針灸基礎理論 (基礎的な中医用語、及び、陰陽、五行説、八綱弁証、四診、臟腑経絡説などの基礎概念)、Point locationを、2年次には、中医臨床学 (中医弁証病理学、診断学、配穴学、などが授業、少人数のゼミの形式で教えられる)を学ぶ。3年次では、病態別中医病理学が授業で、そして、臨床実習で各学生が担当する患者のケーススタディがカンファレンス形式で教えられる。ケーススタディは、教師1人に対し、7-8人の学生がグループになり、臨床実習で出会う難しいケースを各学生が選び、その診断、治療方針、治療の進展、予後、問題点など30-40分の枠内で、質疑応答を含め、活発な論議が行われる。

授業に平行して、3年次は、論文・研究 (「遣伝子と腎精の関係」、「三焦の古典における解釈」、「鍼灸治療と糖尿病」などの学術研究論文のタイトルがみられる)及び、臨床実習に200時間が割かれている。

臨床実習は、大学内にある総合附属医院 polyclinicで行われる。治療は完全予約制で、週に3日、針灸治療が行われて、残りの日は他の療法

が行われている。clinicは、受付、待合室、6部屋の治療室、カンファレンスルーム、学生が集う部屋、カルテ室から成り、非常に広々としており、清潔感が漂う。各治療室は完全なprivacyが確保される個室形式であり、治療中の1時間の多くは、学生と患者は、2人で治療に集中する。英国での鍼灸治療の現実を反映し、ここでは、患者の身体的な疾患、痛みを取り除くことを第一目標として、患者の精神的な悩み、苦痛、生活指導を含めた全人格的な患者との関わりを持つことも非常に大切としている。

このような針灸治療が英国社会で求められているとの認識から、学生は治療者としての自身の精神的・身体的な状態、また、患者の要求、二者の意志疎通を観察・認識する能力を高めることに多大な注意を払っている。このような治療者と患者の関係にも注意深くある針灸治療をreflective practice（内省的治療の実践とでも訳せようか）と呼んでいる。

英国では、ある著名な病院での幼児の心臓手術に伴う死亡率が異常に高いことが最近明らかにされ、病院、医師の倫理・管理問題のスキャンダルになった。これをきっかけにして外科医の個人名別の手術に伴う死亡率の情報公開が市民からBMA（British Medical Association、英国医師会）に求められており、政府も強い関心を示していると伝えられる。これは一つの例に過ぎないが、近年医師の技術・倫理観の低下が英国では問題になっており、reflective practiceは医療従事者の自身による自己チェック能力を高めることの重要性が認識されつつある。

このような医療を取り巻く環境の中、精神分析の教育を受け家族療法の長い治療経験も持つデッサン講師が担当しているpractitioner developmentの講座はLSATCM教育の特徴の一つであろう。この講座は1年次から3年間継続的に行われて、内省する能力、コミュニケーション能力、倫理的な問題、など平たくいえば、治療者としての、人間としての人格形成を具体的な方法で熟成させることを主眼においている。

4. 卒業後の進路

卒業後の進路は、自由診療の確立と、経験を積むためのボランティア治療の二本立てでキャリアを積んでいくのが通常といわれている。在学中に経験豊かな治療者のもとで修行に励むといった方法は、見あたらない。これには、3つの理由があるようだ。まず、経験豊かな治療者の少ないこと、つぎは、プライバシーを大切に自由診療のスタイルの治療が中心のため、学生や若い治療者を治療室で同席させにくいという事情があるようだ。最後に、学位を取得しないと保険がかけられないことである。

ボランティアでの治療は経験を得るという面から、また、老人ホーム、ホスピス、IDT（Immune Development Trust）、STRESS Project、HAGA（Herlingey Advisory Groups on Alcohol）などがあげられる。HAGAはアルコール、薬物依存・中毒の治療を専門にするロンドンの一地方自治体の援助による組織であり、IDTはHIV、AIDSを中心に治療を行うチャリティ組織である。

一方、自由診療に関しては、いくつかの治療環境の選択がある。イギリスでは、Multidiscipline clinic（様々なcomplementary medicineの治療・ホメオパシー、カイロプラクティス、オステオパシー、リフレクソロジー、指圧、催眠療法、理学療法、精神分析療法、カウンセリング等々を多元的に提供する治療院）の形式が盛んである。もちろん、自宅で開業というのも一般的である。理解のあるGP（家庭医）の治療院で、また少数ではあるが、針灸治療専門の治療院でも治療を始めるものもある。治療費は、正確な統計ではないが、家賃の高いロンドン市内で一回当たり30 - 45ポンド（6000 - 9000円）が平均的なところであろう。

多くの学生は、時間と金銭的な余裕があれば、中国で針灸のさらなるトレーニングを積みたくと考えているようだ。中国でもこのようなニーズに対応した様々なコースが準備されており、情報も豊富だ。

5. 現在の問題と今後の発展

LSATCMの校長、モイヤー氏（Felicity Moir）は、大学教育の一部として再出発後、教育水準の一層の向上、古典・臨床文献の研究により中医学の理

解が深まる、complementary medicineの他分野の治療者とのネットワークの形成・交流などの具体的なメリットが見られるという。

彼女は今後のWestminster Universityでの鍼灸教育の課題として、以下のように述べている。まず、臨床実習時間の充実の必要性、現在の200時間を300-400時間に近い将来引き上げるといふ。さらに、現在の大学付属院での臨床実習だけではなく臨床実習形態の充実の可能性として、オステオパシーの教育モデルにならぬ経験豊かな治療者のもとで一定期間の研修実習を行う、あるいは、NHS (National Health Service, 国民健康サービス)での臨床観察・実習の可能性も模索しているという。ただし、これらに関しては、プライバシーを重視する自由診療を行う治療者が多いこと、また、制度的にNHSは人的・経済的な組織構造が巨大かつ複雑なために理解・協力が時間が必要だといふ。

つぎに、LSATCMでは、より高度で専門的な研究を行う場としての修士 (MSc, Master of Science) レベルのコースを開設予定している。現在は、パートタイム1年間のdiplomaレベルでの鍼灸師向けの湯液のコースを設けている。これは、British Acupuncture Council (BAcC, 英国鍼灸協会、英国最大の鍼灸家団体、会員数約、2000人)の会員は漢方・中医の方剤 (patent formulaと呼ばれる) に限り使用が認められており、湯液への関心が高まっている背景がある。このほかにも、短期のコースで、日本式の鍼灸の手技 (お灸、皮内針、瀉血など) を紹介するもの、中国すいなマッサージのコースが用意されている。

6. 日本鍼灸への関心

無印良品の outlet、回転寿司、ラーメン屋のチェーンの大流行に見られる、モノではなく文化・生活様式そのものが注目される第二の日本ブームのなか、鍼灸といえば、中国一辺倒であったが、ここ数年、東洋医学治療者の間での最大の話題は、日本の鍼灸のスタイルへの興味と関心の高まりである。もちろん、大学教育で正規のカリキュラムに含まれるほどの市民権を得ているわけではない。現在では、アメリカから松本岐子氏、オランダからスティーブンバーチ氏 (Steven Birch) を招き講

習を開く形式、あるいは、ヨーロッパの鍼灸家のためにオランダで1年間のコースを設けるという形式が取られている。

LSATCM講師のキビティ氏 (Oran Kivity) によると、日本鍼灸への関心の高まりには幾つかの理由があるという。まず治療結果が良いこと、中国式の刺激の非常に強い治療方法を好まない英国人の患者には好評なこと、中国鍼灸に比較して日本鍼灸の患者からのフィードバックを重視する治療のスタイルが評価されているという。と同時に、統一性を特徴とする中国鍼灸 (いわゆるTCM: traditional Chinese medicineのスタイルを指す) に慣れた英国の治療者には多様な治療方法をもつ日本鍼灸にとまどうものもいるのではという。これは、英語文献が殆ど皆無なこと、良い指導者の不足が原因と思われる。彼は、日本鍼灸への関心はこれからも確実に強まるといふ。

おわりに

保守的な社会と思われがちな英国であるが、労働党党首、ブレア首相の就任以来、「変化」を良いとする価値観が積極的に受け入れられるようになってきた。この社会のムードの変化とともに、20年近くニューエイジ、ヒッピーのための際物のように見られてきた東洋医学への認識も大きく変化しつつある。市民の西洋医学への不満と鍼灸治療の確実な治療効果・実績が認識されるに従い、東洋医学の定着も進んでいるように見受けられる。

私自身、英国で精神分析家としてのトレーニングを受けつつ、現代社会での自己実現に向けての癒しの行為にいかに関わっていくかを模索している段階である。読者の皆様からのご感想、ご意見、ご質問、お問い合わせをお待ちしている。

謝辞：本稿をつくるにあたり協力を得たWestminster University、CCCP学部、LSATCMのモイエー氏 (Ms Felicity Moir)、デッサー氏 (Mr Arnold Desser)、コールドハム氏 (Ms Sybil Coldham)、キビティ氏 (Mr Oran Kivity)、またロンドンのKanpo Association デソリアノ氏 (Ms Gretchen De Soriano) に感謝を申し上げます。